

調査報告

一〇八

向田邦子『あ・うん』

雑誌発表形と単行本における異同および生成について

山口 みなみ

本論文は向田邦子の長編小説『あ・うん』（昭和五六年五月二〇日、文藝春秋）について生成論的考察を試みるものであるが、まず始めに『あ・うん』について簡単に説明しておく必要がある。それというのも、『あ・うん』にはいくつかの形態があり、単に向田作『あ・うん』という場合、いずれを想定しているのか特定せねばならぬからである。分類は大まかに次のとおりである。

- ① NHKドラマ人間模様『あ・うん』（昭和五五年三月九日放映）および『続あ・うん』（五六年五月一七日放映）
- ② ①のノベライズである向田著の小説
- ③ 向田の没後、大和書房、新潮文庫などがテレビドラマの放送用台本を読物として刊行したもの
- ④ 映画（昭和六四年一月三日、東宝）

本論文で扱うのは②と③であるが、②はさらに細かく分類する必要がある。すなわち、

a 初版本

b 初版以降の単行本・全集・文庫本など流布本

c 雑誌発表形

初版以降、本文に若干の手入れが見られるので、aとbとに分けたが、手入れがどの版で行われたのかについては未調査である。本論文では底本に初版本を用いたが、aとbとに重大な違いはないものと考え、a、b含めて単行本『あ・うん』と称することとする。また、a、b、cの別を問わない場合は小説『あ・うん』と称する。cについては、昭和五五年三月五日『別冊文藝春秋』掲載「あ・うん」、その続編にあたる昭和五六年六月一日『オール読物』掲載の「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」が雑誌発表形ということになる。なお、雑誌発表形について気になる点を挙げると、初版本刊行よりも「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」の発表が遅いことである。通常であれば、雑誌発表の後に単行本化する流れが一般的であろうと思われるが、やや例外的であったと指摘できる。以後cを話題とする際は、雑誌発表形「あ・うん」とし、「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」も同様とする。また両作を含めて、あるいは都度明記しなくとも判別可能と思われる場合は、単に雑誌発表形と称することとする。

さて、本論文の趣旨は雑誌発表形と単行本『あ・うん』、さらに脚本とを比較することで、生成論的アプローチを試みるものである。単行本とは内容が大きく異なっているにもかかわらず、これまで雑誌発表形を顧みた研究は管見の限り見当たらない。いわば雑誌発表形は小説家向田の可塑性を示す重要な資料である。豊田健次は『それぞれの芥川賞直木賞^{〔1〕}』で、『あ・うん』小説化の経緯を次のように語る。

昭和五十四年の暮のことでしたでしょうか。社に向田さんが来られて、「テレビの仕事は、どんなに努力しても一瞬に消えてしまう。やはり活字で残したいという気持が日に日に強くなった。そこで、小説を書きたいのだ

脚本『あ・うん』昭五・五・三九〇放映	雑誌発表形『あ・うん』別冊文藝春秋昭五・五・三・五	単行本『あ・うん』昭五・六・五・二〇文藝春秋
「こま犬」 「蝶々」 「青りんご」 「弥次郎兵衛」	「1」 「2」 「3」 「4」	「狛犬」 「蝶々」 「青りんご」 「やじろべえ」
脚本『続あ・うん』昭五・六・五・二七〇六月一四放映	雑誌発表形『やじろべえ(あ・うん パートⅡ)』オール読物昭五・六・六・二	
「恋」 「四角い帽子」 「芋俵」 「実らぬ実」 「送別」	「1」 四角い帽子 「2」 芋俵 「3」 四人家族	「四角い帽子」 「芋俵」 「四人家族」

が、はじめてのことで不安でならない。手はじめに、ノベライゼーション——放送台本の小説化というかたちでやってみたい。ついては、『あ・うん』という作品をHNKにわたしてあって、もう出来上がっている。試写会が近くあるから、それを見て、豊田さんがこれでもよろしいというのであれば小説にする」というお話でした。

向田初のノベライゼーションは『寺内貫太郎一家』（昭和五〇年四月二九日、サンケイ出版）であり、『あ・うん』は二度目の作ということになる。だが、「はじめてのことで不安でならない」と豊田に語ったように、向田にとって『寺内貫太郎一家』は小説として納得のいくものではなかったようである。以降、「幸福」（五五年九月一日、『オール読物』）「隣の女―現代西鶴物語」（五六年五月一日『ドラマ』）といった小説が、同名ドラマとほぼ並行して雑誌に掲載された。したがって、これらもおおまかにいえばノベライゼーションということになるのだらう。だが、『寺内貫太郎一家』や『あ・うん』ほど脚本に寄りかかつてはおらず、この時点で脚本と小説とは明確に分かたれている。それでは、『あ・うん』は単に脚本を踏襲した作という位置づけでよいだろうか。なるほど、展開や各回のエピソード等、確かに脚本に即しているといえる。けれども、『寺内貫太郎一家』のリライトが、とうとう脚本を脱するものとはならなかったことと比すれば、『あ・うん』はノベライゼーションとしては

かに成功しているだろう。とはいえ、けっして容易くやり遂げたことを意味しない。むしろ脚本と小説との間でその違いに揺れながら、小説としてなんとか書ききったというような類のものである。このようなリライト時の困難を物語っているのが、雑誌発表形「あ・うん」および「やじろべえ(あ・うんパートⅡ)」と単行本とに見られる異同なのである。では実際に、向田がどのように小説に挑んだかを審らかとしていくが、まず各話タイトルの変遷について整理しておく必要がある。あわせて前頁の表を参照されたい。脚本『続あ・うん』の「恋」、「実らぬ実」は単行本・雑誌発表形には存在しないタイトルだが、「恋」は「四角い帽子」に、「実らぬ実」は「芋俵」の内容に含まれている。また、「送別」は「四人家族」へとタイトルを変更している。各話タイトルの変遷は以上である。

次に単行本と雑誌発表形の本文異同についてだが、調査から次のように考察した。なお、異同の委細は資料編を参照されたい。

雑誌発表形「あ・うん」の「1」(脚本・単行本で「狛犬」にあたる章)には、「2」、「3」、「4」と比すれば大幅な書き入れは見られない。このことから考えられる可能性として、入稿時「1」まではドラマ収録が済みであり、「2」、「3」、「4」にあたる回は収録中あるいは未収録であったということを挙げられるが、仮にそうであるとしても、すでに『あ・うん』の骨格はできあがっていることをうかがわせる。ちなみにドラマ『続あ・うん』では当初、第一回、第二回、という回数の表示のみで、各話タイトルはなかったようである⁽²⁾。だが、ドラマ『あ・うん』の各話タイトルがどうであったかについては不明である。とはいえ、当初は回数のみで、後に各話タイトルが付されたのだとして一応矛盾はない。したがって、雑誌発表形「あ・うん」は構想時の俤を残していると考えられるのである。詳しくは後述するが、雑誌発表形には存在しなかったエピソードの挿入が、単行本では顕著に行われている点も非常に興味深い。

同じく雑誌発表形の「やじろべえ(あ・うんパートⅡ)」にも、それなりの加筆削除が行われているものの、筋自体の

大きな変更はない。すでに『別冊文藝春秋』に前作「あ・うん」を發表していることを考えれば、それも当然であるといえるだろう。ただし、掲載誌が異なっており、いわゆる連載小説と見做してよいかという疑問は残る。そのため、「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」には前作未読者に向け、情報を補う加筆が散見する（単行本刊行時には削除）。そのほか字句、句読点、ルビなどの細かな訂正が目立つ。

さて、雑誌発表形「あ・うん」が、脚本・ドラマとはやや展開の異なるものであったということが、調査の結果明らかとなったが、雑誌発表形がそもそも脚本とは別の展開を意図していたか否かについては不明である。ともかく、『あ・うん』は向田が脚本を小説に書き直すことに初めて成功した作である。その根拠として、ここで脚本と単行本の冒頭を比較してみたい。

脚本『あ・うん』「こま大」（『あ・うん 向田邦子TV作品集9』大和書房、一九八七年六月五日）

● 仙吉の家・風呂場

焚き口にうずくまり風呂を沸かしている門倉修造（43）

薪を入れ火吹き竹で吹く。

金のかかったモダンな背広姿。

門倉の会社の小使い大友金次（60）がとんでくる。

大友「社長！ 社長さん。そんなことは、自分が」

門倉「風呂焚きは俺がやりたいんだよ」

単行本『あ・うん』『狛犬』（文藝春秋、昭和五六年五月二〇日）

門倉修造は風呂を沸かしていた。

長いすねを二つ折りにして焚き口にしゃがみ込み、真新しい渋うちわと火吹竹を器用に使っているが、そのいでたちはどうみても風呂焚きには不似合いだった。三つ揃いはついこの間銀座の英國屋から届いたものだし、ネクタイも光る石の入ったカフス釦も、この日のために吟味した品だった。

小使いの大友が、

「社長」

と何度も風呂場の戸を開け、自分が替りますと声をかけたが、そのたびに門倉はいいんだと手を振った。

「風呂焚きはおれがやりたいんだよ」

あいつが帰ってくる。親友の水田仙吉が三年ぶりで四国の高松から東京へ帰ってくる。長旅の疲れをいやす最初の風呂は、どうしても自分で沸かしてやりたかった。今までもそうして来た。

引用からわかるように、登場人物に寄り添う語りの有無が、脚本と小説との最大の相違点と言えるだろう⁽³⁾。たとえば『幸福』なども脚本と小説とを見比べることができる作であり、脚本と小説両者の違いが『あ・うん』と比べてさらに際立っている。ドラマも小説もそのタイトルは『幸福』であり、テーマも共通しているが、両者は書き方も視点も大きく異なっている。脚本は脚本であり、小説は小説であるのだから、それぞれにふさわしい書き方をせねばならぬ。けれども、ノベライズという方法をとる以上、書き分けることはかえって困難であるかもしれない。『寺内貫太郎一家』のノベライズ化が、恐らくそのことを指し示している。試みに、『寺内貫太郎一家』の脚本と小説とを見比べてみる。

脚本『寺内貫太郎一家』「1」（『寺内貫太郎一家前篇 向田邦子TV作品集10』大和書房、一九八七年二月五日）

貫太郎「なに愚図愚図してんだ！」

里子「すみません」

夫のどなり声は日常のことらしく、里子は気にしていない。ケロリとあやまる。

貫太郎、水を神前にそなえる。

里子は朝刊を抜きとり、デスクの上におく。

手まめにそのへんを片づける。

貫太郎、大きく伸びをしながら、仕事場へゆきかける。

（以下、会話ともパントマイムともつかぬ夫婦のやりとり——）

里子「あ……。お父さん」

貫太郎「なんだい」

里子「ちょっと」

里子、貫太郎の首から下げたお守りを腹巻の中に押しこんでやる。ことのついでに、突き出た夫の腹をポンポンと軽く叩く。

貫太郎「（フン……）」

大きな背を見せて出てゆく貫太郎。ワンマンではあるが、要所要所は里子に押えられている感じ。

小説『寺内貫太郎一家』「2石頭」（前出『向田邦子全集三卷』所収）

「なに愚図愚図してんだ！」

「すみません」

貫太郎のどなり声は日常のことである。里子は気にしていない。ケロリとして謝りながら、貫太郎が首からブラ下げている成田山のお守りを腹巻の中に押し込んでやる。ことのついでに、見事に突き出た夫の腹を、軽くポンポンと叩く。貫太郎は、フン、といった顔をしてうそぶいている。どうやら小学校へ出かけてゆく子供が、母親に「気をつけて行つてらっしゃい」とランドセルを叩かれているようなところもある。ワンマンではあるが、要所所は女房の里子が押えているようだ。

向田作のドラマ脚本が流布したのは向田の没後のことであるから、小説『寺内貫太郎一家』刊行当時、読者が脚本と小説とを比べることはできなかった。いま両者を突きあわせてみると、向田の苦悩を想像できるように思われる。すなわち、脚本をあらためて小説に書き起こす「意味」に突き当たってしまうのだ。脚本を脱することができない、というのはつまりそういうことである。小説『あ・うん』執筆時、『寺内貫太郎一家』での失敗（こういつてよければだが）は、向田の頭の片隅にあったはずである。

ところで、雑誌発表形「あ・うん」が、脚本とは別の展開・別の視点で意図的に著されたとすれば、単に脚本をリライトしようという場合に比べ、より強く「小説」を意識していたと言える。雑誌発表形「あ・うん」を脚本執筆時におけるプロットと見做すか、あるいは脚本の転用ではなく、小説への挑戦と見做すかではまったく異なる結論をもたらすことになるだろうが、今のところプロットであり小説への挑戦であるというよりほかに適切な説明はない。ともかく、おおよそ脚本の内容に沿ってはいるが、『あ・うん』は小説を書くという意識を手放さなかった作であるといえるので

ある。

次に、雑誌発表形ではなく、単行本で挿入されたエピソードについて述べたい。底本の頁・行数の下に、該当箇所の筋を記した。なお、（ ）内は雑誌発表形の筋である。

「蝶々」

60・13～63・13 山師として一山当てたい初太郎に、門倉が元手金を貸す。（門倉は初太郎に元手金を貸そうとするが、たみが断る。）

64・14～70・9 門倉の愛人である禮子のため、アパート探しに奮闘する仙吉の様子に、たみは弾んだものを嗅ぎつける。そのことを指摘すると、仙吉は吉川英治の「宮本武蔵」第二巻を読んでごまかす。それから一週間ほど経って、君子が水田家を訪れ、門倉が世話になったとようだと二人に礼を言う。どこかとげのある物言いに夫婦は焦るが、小一時間ほどで君子は帰る。その夜、仙吉は君子を心配し、門倉家へと向かったところ、君子がまさに自殺を図ろうというところであった。（仙吉が「宮本武蔵」を読む場面はなし。門倉家のばあやが、君子の様子がおかしいと告げに来る。仙吉は慌てて門倉家へ向かう。門倉に子が出来たことを知って、君子は自殺を図るところであった。）

71・14～75・3 たみの入浴中、連帯保証人門倉修造と書かれた借用書を仙吉が見つけてしまう。（該当場面なし。）

「青りんご」

78・4～85・3 仙吉が風邪で勤めを休んでいるところに禮子がやってくる。その後君子がさと子に見合いを勧めにやってきて、禮子とあわや鉢合わせという展開。（君子が見合い話を水田家にもってくる。禮子は登場しない。）

88・1～91・10 仙吉の部下が会社の金を使いこんだことが発覚。代わりに門倉が用立てることとなる。そのため

に仙吉はさと子の縁談を断る。(使いこみの場面はなく、仙吉が気乗りしないとの理由で縁談を断る。)

97・13～101・12 金を用立てたことで、門倉の会社は資金繰りに窮してしまふ。身重である禮子のために生活費を渡してほしい、と門倉は仙吉に金を託す。見かねた仙吉は、へそくりを出してほしいとたみに頼むが、断られる。(門倉の会社が資金難となり、困窮。見かねた仙吉は、へそくりを出してほしいとたみに頼むが、断られる。)

「やじろべえ」

105・6～107・3 禮子に子が生まれ、仙吉は病で伏せっている門倉に、母子共に元気であることを報告する。(該当場面なし)

「やじろべえ」

110・3～123・2 さと子と辻村の逢引きを阻止するため、初太郎が見張り役となる。ところが初太郎一人が帰ってきたことで、仙吉とたみは若い二人の墮落ちを疑う。さと子の部屋を調べると「辻村さと子」、「墮落」、「鬼怒川塩原」などのいたずら書きを発見。夫婦は急いで鬼怒川に向かう。結局、墮落ちは勘違いであることが門倉からの電話で判明。その後、門倉も鬼怒川の旅館へ合流することとなる。鬼怒川から帰るとすぐ、君子が水田家へやってきて、門倉と別れようと思うと打ち明ける。しかし仙吉が「おかしな形はおかしな形なりに均衡があるのだ、と君子を諭し、君子は離婚を思いとどまる。そのやりとりを尻目に、さと子はこっそりと家を脱け出し、辻村に会いに行く。(初太郎が辻村とさと子の見張り役となる。さと子は病に伏せっている門倉を見舞いたいと初太郎を誘うが、断られたためさと子一人で門倉を見舞う。門倉とさと子のやりとりは君子が帰ってくるまでの間続く。)

「四人家族」

239・9～240・14 さと子は石川義彦の元へ走りながら、門倉がいつも「陰になり日向になって」くれていることに思いを馳せる。(該当場面なし。)

以上、単行本で挿入されたエピソードは、『あ・うん』読者にとって非常に印象的かつ重要なものである。これらのエピソードは登場人物同士の諍いが発端となつて生じる。ところが雑誌発表形「あ・うん」では、門倉の妻君子と愛人禮子のニアミスや、禮子の人物像はほとんど書き込まれていない。また、「やじろべえ」での仙吉・たみ・門倉の微妙な均衡を表現した鬼怒川の場面も、雑誌発表形「あ・うん」にはやはり存在しない。タイトルと場面の関係からいえば、雑誌発表形の「4」の内容は「やじろべえ」(脚本では「弥次郎兵衛」というタイトルにはなりえない。「3」の「青りんご」も同様である。とはいえ、雑誌発表形「あ・うん」が、脚本や単行本「あ・うん」とは異なる展開を見せていたことは注目に値する。たとえば、脚本・単行本での鬼怒川の場面は、雑誌発表形ではさと子と門倉のやり取りが中心であつた。愛のかたちや恋愛についての悩みを門倉に打ち明けようとしていたさと子であつたが、門倉と二人でいるだけで十分満たされた心持となる。「そばに座っているだけで、どこか騒ぐものがある。もしかしたら、子供の頃から、あたしも門倉のおじさんのことを好きだったのではないかと思つた。」とあるように、雑誌発表形はさと子の心持に依拠しているのである。若い女性のみずみずしい心境が描き出されており、それがこの箇所の魅力である。また、どこことなく書き手自身が乗り移っている気配もある。しかし結局、向田がドラマや単行本で選んだのは、さと子の母親であるたみの心の揺れを描くことであつた。そもそも主題となつているのは、仙吉・たみ・門倉の三人の関係であるのだから、鬼怒川の場面は書かれてこそ、であらう。だが、ここで一度封じられてしまったさと子の心持は、単行本「あ・うん」『四人家族』で再度表出することとなる。けれどもそれは、書き手自身がどうしても書かねばならなかつた場面として書かれるのである。

七五三のときの、まるで重箱のような塗りの極上ぼっくりも、小学一年生のときのランドセルも、みな門倉の

強引な贈物だった。ランドセルはまだ珍しい時期で、さと子は学校でいじめられ泣いて帰った。あのときも、門倉は手をつけて謝っていた。

さと子の十九年の写真帳のなかに、影になり日向になっていつも門倉がいた。

単行本『あ・うん』『四大家族』

門倉も家族同然であった、という意味で「四大家族」というタイトルを付したのだろうが、さと子はその「四大家族」から飛び出し、恋人石川の元へと駆け出す。親を振り切ってまで自らの恋を成就させるところに、もう一つのテーマが隠されているのである。たとえば、ドラマ『家族熱』は、ある家に縛られた前妻と後妻の軋轢をメインにした話であるが、関連のエッセイを読むと、むしろ娘の立場に関心を寄せていることがわかる。

モーパッサンの『女の一生』のジャンヌが、はじめての夜に愛情を感じず、ひいては冷たい結婚生活から破局へ到るのも、生れ育った家や、父親に対する愛が強すぎるためではなかったのか。人生に対するうしろ向きの視線のせいではないのか⁽⁴⁾。

つまり元の家族にとらわれたために、自らが起点となる家族を持つことのできない娘に、である。しかしこれは『家族熱』の主題からは逸れるものだ。元の家族にとらわれた娘の心持は、向田にとってどうやら避けることのできないテーマであった。とはいえ、我々はそれを向田のファザーコンプレックスであると短絡的に見做すべきでもない。そのような疑いのまなざし(うしろ向きの視線⁽⁵⁾)を、自らに向けていたことは確かであるとしても。

再び『あ・うん』についていえば、さと子が仙吉の制止を振り切って恋人を追いかけていくことと、向田が自身へ向ける「うしろ向きの視線」とは無関係でない。元の家を出るということへの躊躇、あるいは後ろめたさを解放してやらねばならないのである。そして、自らのために親や家を顧みなくとも構わない、そういう思考の転換をもたらし、解放を手助けする存在として、門倉はいるのである。「四大家族」の先引用を見ると、門倉がいかに水田家にとって重要な存在であるかを読み取ることができるが、そのために仙吉は父親としての立場を危うくしている。いや、父親としてのかなしい威厳だけが取り残されている、というほうが正確かもしれない。もちろん、明治生まれの父親が、そもそも娘の気持ちを優先するかどうかという指摘はあるだろう。しかし、実際の行動とは裏腹な感情の有無を断ずることはできない。「仙吉の背中がこんなにやくのように震えているところを見ると、彼も声を殺して男泣きに泣いているらしい」とあるように、娘を引き留めたいのも背中を押してやりたいのも本心には違いない。しかし仙吉は最後まで、娘の背中を押してやることはできなかった。考えてみると、仙吉はもう一人の自分(門倉)を常に欲している。本来一人の人間が抱えていてしかるべき相異なる面を、仙吉と門倉というキャラクターに分裂させたことで、時に門倉は友人として以上の役割を果たす。かたや仙吉はいえ、行動とは裏腹の、もう一つの本心を門倉に譲るのかとく引つ込めてしまうのである。しかし、そうした本心がありながら、ついに自らで組み伏せてしまうことを鑑みると、娘は父親の裏腹の本心に勘づきながら、実際は父親の行動の方に従わざるをえないことになる。もっとも重大なのは、書き手向田がそのようなメカニズムを承知している点である。

裏腹の本心を持った父親と、元の家を出ることに後ろめたさを抱く娘。その両方を解放するというのが、『あ・うん』に隠されたもう一つのテーマである。

注

- (1) 豊田健次『それぞれの芥川賞 直木賞』平成一六年二月二〇日、第二刷三月一〇日、文藝春秋
- (2) 勅使河原平八「幻となった『続続あ・うん』」『向田邦子TV作品集第9』月報 大和書房、一九八七年六月五日 「手許に『続あ・うん』の五冊の台本がある。表紙にはそれぞれ回数が刷り込まれているのは当然だが、その横にペン書きで、サブタイトルが記入されている。(略)録画の終了と同時に出来上る完本ともいうべき活字台本に、サブタイトルは印刷されていない。最初はなかったのである。」
- (3) 語り手が存在感を発揮する小説と脚本とはまったく異なるという点をついたジェームズ三木の指摘(「連立方程式」『冬の運動会 向田邦子TV作品集3』月報 大和書房、一九八二年五月一〇日)がある。「シナリオは伝達の手段であって目的ではない。作者が自分の内部に造形し構築したドラマを制作現場に分りやすく伝えるためにやむを得ず書いているのであってほかにもっといい方法(楽譜とか設計図とかのように)があれば文章で表現する必要はないのだ。／従って脚本家は直接表現である「セリフ」には全力を傾注するが「ト書」の文学的表現にうまみやつすということはまずない。ドラマの形が現場に伝わればそれでいいのである。」
- (4) エッセイ「家族熱」『向田邦子全集第二巻』文藝春秋、昭和六二年八月一日
- (5) 松井孝史訳 ヴィルヘルム・シュテークル『性の分析 女性の冷感症Ⅰ』(三笠書房、昭和三〇年六月一五日)に「自己の人生の危機において、うしろ向きの視線の力を容易に認めるであらう。」という記述がある。

資料編

本資料編は『別冊文藝春秋』昭和五五年三月掲載「あ・うん」及び、『オール読物』昭和五六年六月特別号掲載「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」と、単行本『あ・うん』の本文異同について検証するものである。

凡例

○昭和五六年五月二〇日文藝春秋刊『あ・うん』を底本として用いた。

○底本本文の頁・行を示し、初出本文と異なる箇所を「」で括り、「初出本文↓底本本文」のように表す。必要に応じ、前後の文脈も抜き出す。

○初出にはない語・文の挿入を底本に認められる場合は「（ナシ）↓底本本文」、初出にある語・文を底本で認められない場合は「初出本文↓削」とした。また、改行を伴う字下げを□で、文中の字下げを□で表す。「」内では「改行ナシ」↓□底本本文とする。また、登場人物のセリフなど、文頭がカギ括弧で始まる場合も改行字下げとみなす。

記号が続くことによりかえって煩わしいと思われる箇所については、可能な限り表記を簡略化した。また、複数頁にわたる挿入は、著作権に配慮し、中略とした。

『別冊文藝春秋』掲載「あ・うん」

「1↓狛犬」

7・10 カフス「鉦↓鉦」ボタン

8・7 「簀↓簀」の子も「ナシ」↓、「新しい

8・11 注文は「座↓坐」 っいてても

9・1 門倉と違って「つまましい↓つまましい」

9・4 門倉は「住↓社」宅探しを

9・9 所帯道具を「整↓調」ととのえる

10・6 「露↓路」地を入ったところで見つけたのである。

「ナシ」↓「たみは」疲れが出たのか、

10・9・11 □仙吉は門倉とあい年である。「ナシ」↓

門倉は羽左衛門をもっとバタ臭くしたようなと言われる
美男で、銀座を歩けば女は一人残らず振り返るといわれ
たが、仙吉のほうは、ただの一人も振り返らない男だっ
た。』見映えのしない外見に

11・3 大きな「もくれん↓木蓮」が

11・4 「もくれん↓木蓮」が

11・6 さと子は、「五↓六」年前のことを思い出した。

11・7 東京「支店↓の本社」へ

11・9・11 「↓削」今度もそうかしら「↓、」

12・1 □たみも「相槌↓相槌」あいづちを

12・8 「札↓熨斗紙」のしがみをつけた

12・13 無駄「使↓遣」い

13・10 「枡↓枡」ますが

13・12 違う「?↓の」

14・1 「美しか↓綺麗だ」った。いままでさと子は、

母を「特別美しい↓格別綺麗だ」と

14・2・5 「平凡な顔立ちである。ムキになった↓か
らだも小作りだし、色の白いだけが取柄のありきたりの
顔立ちである。□なにかというとすぐムキになり、ム
キになると「いい年をして、一年生が駆けっこしている
ような顔」になると仙吉は言っていた。その」ときの顔は

好きだった」が、

- 15・14 □「いきなり芋俵↓あったかい塊」が隣りに
- 16・2 この店を「買い↓借り」切って
- 16・12 四角い大きな箱を抱え「た↓て入ってくる」門倉
- に
- 17・1 仙吉が飛び出「て↓して」来た。
- 17・6 たみは「↓削」
- 17・9 □「たみが上り」が「か」まちに
- 17・11 □「奥さん」↓削「仙吉が、
- 18・13 刺繍」をするしぐさ↓の真似」をしてみせた。
- 19・1 凝っているらし「かった↓い」。
- 19・2 「座↓坐」っていた。
- 19・4 よお「↓削」という風に
- 19・11 □「と取りなし」、たみが低い声ではなしを引き
- 取った。 □「それでもないんですよ」↓たが、「
- 19・14 ↓20・2 □「ナシ」↓鳥屋は鳥に似てくるし、
- 鰻を割く職人の顔はだんだん鰻に似てくるというが、初
- 太郎は木に似ていた。古木である。からだつきもがっし
- りしていたし立派な顔立ちだが、暗く孤独で鬱蒼うつそうとして
- いた。耳の穴には御丁寧にも剛毛が生えていた。」初太郎
- は山師である。
- 20・10 「叱言↓叱言こごと」ばかり
- 20・14 ↓21・1 「改行ナシ」↓□「これは志賀直哉の
- 「小僧の神様」↓「小僧の神様」の書き出しだが、
- 21・10 いくら考えても「答えが出↓判ら」なかった。
- 23・7 と「座↓坐」った
- 23・12 怒るとも恥「しい↓じらう」とも
- 24・7 「人魂↓人魂ひとたま」のように
- 24・10 叩いて「整↓調」えた
- 25・3 生「ま↓削」れるときは
- 25・10 ならんで「座↓坐」っていた。
- 26・11 「舶来の↓削」「エアシップ」である。一本抜
- いて火をつけた。
- 27・2 恩賜の煙草でも「吸↓喫」うような
- 27・14 母が子供を「生↓う」む。
- 28・2 「見えて↓浮かんで」きた。
- 28・7 胸が「突↓つ」つかえて」

28・10 書いてあるじゃない「〈ナシ〉↓か」

28・11 おやこ電「氣↓球」の

28・12 汚れた足袋の「↓〈削〉」片方に「〈ナシ〉↓」も
う片方を

30・8 「到↓至」れり尽せりの

32・10〜11 軍隊から帰って「体をこわし↓肺を患い」、
三年ほど療養所にいた時に縁が出来た。「〈ナシ〉↓顔立
ちも整っているが、気性のほうも」よく出来た女で、

33・10 □「こんどは門倉が棒立ちになる番だった。「〈ナ
シ〉↓□「いま、なんて言った」

33・12 「子供はあなたの子でしょ「〈ナシ〉↓、と言っ
たんですよ」

33・14 「お前は↓〈削〉」なんてことを言うんだ。

34・2 「あいっ——」「じゃあ↓〈削〉」

34・12 哀しみと嫉妬「と↓〈削〉」は見たくない。

35・6 □「毎度のことだ」。↓、「ほっておけ

36・8 庭で「焚火↓焚火^{たきび}」をしていた。

36・13 □「初太郎は「〈ナシ〉↓、」名前を言えば「↓〈削〉」

大抵の人が知っている

36・14 かなりの地位までいった「人だという↓のだ」が、

37・1 山にとり「憑↓憑^つ」かれて

37・3 値を「推↓推^{はか}」り、

38・12 「濯↓濯^{すす}」ぎ物

38・14 「浚↓復習^{さくら}」っているらしい。

39・4〜5 いま「流行↓流行^{はや}」りの断髪だった。「〈ナシ〉
↓突き出した唇を真赤に塗っているせい、縁日で売っ
ている狐のお面に似ている。」カフェ「パタビヤ」の

40・12 □「下腹を押」さ↓〈削〉「えながら、

40・13 砦石をひとつ「〈ナシ〉↓ずつ」のせて、

40・14 斜め「座↓坐」りで、

42・4 「拍子抜けだ「〈ナシ〉↓よ」なあ。

42・14 □「門倉は頭を搔いてみせた。「〈ナシ〉↓仙吉が
取りなし顔で、」

43・9〜10 「軀↓からだ」のなかで、なにかが引き「攣^つ
↓攣^つ」れねじくれて煮えている。「〈ナシ〉↓さっきから」

打ち消し

44・8 □ たみは、「腹を抱え↓お腹を押え」、「体↓からだ」を二つ折りにした。

44・14 「もくれん↓木蓮」の蕾が割れ、

45・4 □ 上り「が↓か」まちのところに初太郎がうずくまって「ナシ」↓煙草を喫って」いる。

45・6 □ 沓脱「ぎ↓削」に

45・11 □ 医「師↓者」と看護婦が

45・13 庭を向いて「座↓坐」っていた

45・14 すこし離れたところに「座↓坐」った。

46・10 ↓ 11 一同頭を垂れて聞いたが、「ナシ」↓父と母と門倉のおじさんの場合は、「それだけではないのだ。

「2↓蝶々」

47・10 黒皮の「瓢箪」↓瓢箪ひょうたん型ひょうたんのケースが

47・13 ここを貸してくれ」↓、「本式で

50・3 □ 徴兵検査「があり、↓で」甲種合格者「は↓になると」兵役の

50・4 寝台のふたりは「、↓削」一組とみなされた。

51・6 「改行ナシ」↓□「門倉は、初太郎の「煙管キセル」を借りて刻みを「吸↓喫」い、いまアルマイトの折り畳み弁当「箱↓削」を試作している、

52・3 「ナシ」↓気がつくとき茶箆ちしほや柱に寄りかかっている。夜、寝汗をかくこともあった。

52・4 人の心にも体にも「ため↓溜」息を

52・11 「ナシ」↓便所の「戸を半開きにして、金「かく↓隠」しを

52・12 袂で鼻を押「さ↓削」えながら、

53・9 □「ナシ」↓封を切る前に「まず神棚に

54・6 「金、気をつけろ」↓□初太郎の咳き込む気配がした。」

54・7 「□初太郎の咳き込む気配がした。↓「金、気をつけろ」

54・11 「仇↓徒あだ」や「おろそ↓疎おろそ」かに

55・4 「蚤↓蚤のみ」いるの？

55・7 「ナシ」↓「おじいちゃん、お金のほう、全然見てなかったわよ」

55・8 「〔ナシ〕↓そういうときのほうが、かえって危
いんだよ。」いやだけど、なんかあつてからじゃあ、おた
がいもつと嫌だものねえ」

56・7 □徹底的に「直↓治」せ。

56・13 「〔ナシ〕↓じゃあ「千五百円か」

57・1 大学病院につてのあるのがある。「。↓、」さと子
ちゃんを「かつ↓担^{かつ}」いでも、

57・9 おふくろ「〔ナシ〕↓が「死んで」「さ↓削」、

58・7 まんなかに「すわ↓坐」って

58・13 買わないことが「愛↓門倉の気持」だったのだ。

59・1〜3 そのまま離れて「すわ↓坐」っていた。「〔ナ
シ〕↓生まじめな顔をして正面を向き、見合いでもして
いるように固くなっていた。仙吉抜きで門倉がたみと出

掛けたのは、これが初めてなのである。」そこだけ

59・12 □「〔ナシ〕↓あわてて締めた」帯を

59・13 「〔ナシ〕↓あつちはちゃんと立てた上で、」血の
つながった

60・1〜11 どうも「馬力↓馬力^{ばりき}」にぶつかったらしいと

いう。「この騒ぎのさなかに、いつの間に目を覚めたの
か初太郎が、曝^{さば}してあつた賞与に手をつけた。初太郎
は、こわばった手で百円札を握りしめ、↓「こりゃひど
いわ。とにかく上つて、足洗わなきゃ駄目だわ」□「そ
りゃいけない。水田のいない留守に上り込んで、靴下な
んか脱いじゃいけないよ」□「怪我してる人がなに言っ
てるんですか。早く」□引っぱり上げようとしたたみは、
茶の間のほうで、かすかな物音を聞いた。たみは小さく
「あ」と叫ぶと、奥へ駆け込み、棒立ちになった。□初
太郎のほうも、晒^{さらし}を二重にしたたみの腹巻から、賞与の
袋を出し、百円札を手にしたまま凍りついた。二人向い
合つて棒立ちになったところは出来の悪い菊人形であ
る。□「おじいちゃん」

60・13〜63・13 □「貸してくれ。必ず返す。半年で倍
にして返す」□「と繰り返した。久しぶりでうまい山を
みつけた、仲間の金歯とイタチと、三ナカでやりたいと
いう。三ナカとは三人で共同出資することだが、百円や
そこらで、どれほどのことが出来るのか。□門倉がと

りなしたが、たみは貸さなかった。↓「勘弁してくださいな」□「うまい山、めつたんだよ。天竜のなあ」(中略)□自分もいくらか用立てるといふ門倉にこれ以上反對することは、子供の誕生にケチをつけるような気がして、たみはそれ以上押さなかった。」

63・14 □初太郎が「、↓削」じろりとたみを見た。

64・1〜2 □口では「やっぱりおめでとうございませうでしょうねえ」↓めでたい」と言ってい「ながら↓るが」、門倉と禮子の間に子供が生れることを、お前さん「、↓削」心底から喜んじやいな、と言っている目「に見え↓であつた。」

64・4〜13 □「バタビヤ」を「や↓辞」めた禮子にアパートを見つて「、引越しを手伝ったのは、↓たのは」仙吉である。「(ナシ)↓アパートを見つながら、門倉がつき合っていた禮子以外の女に手切れ金を配って歩いたりするのだから大変である。□「驚いたねえ。門倉の奴、おれに隠してるのもいてさ。あんまり数が多いんで、言いくかったんだな」□こういうとき、たみはあまり口を

利かない。切れて駄目になった電球を使って、仙吉の靴下の繕いをしている。□「資生堂のパラーで泣かれてねえ。どう見たってカフェの女給だから、みんな見るしさ。おれの女じゃありませんて看板下げとくわけにやいかないし、もうくたびれたよ」

64・14〜70・9 □日頃のお返しに「働くのはいいのだ↓役に立つのはいい」が、くたびれた「(ナシ)↓くたびれた」と愚痴をこぼす「なか↓仙吉の口調」に、「(ナシ)↓いつにない」弾んだものをかぎつけて、たみは「少しおもしろ↓面白」くなかった。□「仙吉にたのまれて、たみが、禮子のアパートに岩田帯を持って見舞いにいった日のことだった。□たみが風呂に入っていると、門倉の家の耳の遠いばあやが、勝手口の戸を細目にあげ、奥様の様子がおかしいという。子供が出来たことを知ったらしい。仙吉は、庭下駄を突っかけて走った。□仙吉が飛び込んだとき、君子は洗面所で昇^{しょうすい}来水の瓶を持ってぼんやり立っていた。↓「結構楽しかったんじゃないですか」□仙吉は、「宮本武蔵」第二巻をひろげた。(中略)

それから昇永水と大きく書いた紙の貼つてある瓶を手に持った。」

70・10～71・13 □ 飲めば死ぬるものを手にして、「何

↓なに」かを待っているという感じだった。「(ナシ)↓玄関のドアも縁側のガラス戸も、みな開けてある。□ 仙

吉が飛び込んで来たのは、このときだった。」□ 仙吉「が↓はものも言わず、昇永水の」瓶をもぎ取「ると、↓つた。」□「水田さん。あたし、生きてるの「がいや↓嫌」になつた」□「奥さん」↓「削」□身を揉んですすり上げる瘦せた「体↓からだ」を、仙吉は強く抱きしめた。いま「↓「削」出来ることはこれしかなかった。これしかないが、これから先、どうしたらいいのか。「(ナシ)↓□は

だけた君子の衿元から、白い胸がのぞいている。子供を生んだことがないせいとか、いつか門倉が岡山から送ってくれた白桃のように大きく豊かである。目の下に大きな二つの白桃が息をして、すこしひしゃげて上ったり下ったりしている。□「奥さん」□「ヘンなどところから声が出たせいか、仙吉はかすれ声になつた。□ 本当にこれか

ら先どうしたらいいのか。」立往生したとき「(ナシ)↓、玄関に気配が「し↓あつた。仙吉は昇永水の瓶を「手に↓持つて」出ていった。「(改行ナシ)↓□「門倉「が↓は玄関の三和土に」立って、「(ナシ)↓大きく外股に脱ぎ捨ててある」仙吉の庭下駄を見ていた。「(改行ナシ)↓□「仙吉は昇永「(ナシ)↓水」の瓶を「(ナシ)↓門倉に」突き出すと、「せい↓目は見ないで、精」いっぱい威張つてどなりつけた。

71・14～75・3 □「女房泣かすような真似しちゃ駄目じゃないか。「(ナシ)↓氣をつけろ。」馬鹿「(ナシ)↓!」□「門倉に瓶を渡し、「目を見ないで、そ↓そのまま反」つくり「返↓かえ」つて出ていった。「(ナシ)↓□仙吉がうちへ帰つたとき、たまは風呂に入っていた。(中略)初太郎はほんのすこし、口をつけ、また夜の庭へ目を移した。(一行アキ)□土曜ごとのヴァイオリンの稽古は、「秋↓夏」いっぱいづづいた。

75・5 せいっぱい合「わ↓削」せようとした。

75・7 麦茶を入れている。「(ナシ)↓(一行アキ)

蝶々□蝶々□葉の葉にとまれ

75・12 とまれよ遊べ□遊べよとまれ「ナシ」↓「一行アキ」さと子は、

76・2 ならんで「すわ↓坐」って

76・3 たみは、「まるで果物のように↓別の女のようにみずみずしく」みえる。

「3↓青りんご」

77・6 仙吉が「ポーズ↓様子」をつくり、

77・8 見物のたみもと子も「↓削」おかしくて

77・10 ワイヤー・ヘアード・フォックス「ド↓削」・テリヤという

77・11 剛毛こゑ「足をもつ↓をし」た

77・14 肉「↓削」食わないぞ」

78・4〜85・3 □「松茸のお返しをもつて、門倉の妻君子がたずねて来た。↓スキーの格好をしたせいか、仙吉は風邪を引き勤めを休んだ。(中略)□「禮子はおっかなびつくり絃をはじいた。ボヨヨンとおかしな音がで

てしまい、二人の女は折り重なるようにして笑いをこらえた。□君子は勿体ぶった手つきで」紫の風呂敷から「出て来たのは、↓削」若い男の写真「だっ↓を出して見せてい」た。さと子の縁談「で↓を持ってきたので」ある。□「まだ年も十八だし、病気のほうもあとひと息だからと、言いかけるために、↓「奥さん」□「無精ひげを気にしながら、仙吉が写真を押しやって頭を下げた。(中略)□「治ったも同然だっておっしゃってたじゃないの。病いは気から。いいおはなしがありや肺門淋巴腺炎なんてすつ飛んでしまいますよ。元看護婦が言うんだから間違いない」□「うなずきながら、もうひとつ浮かぬ顔の夫婦に」□「あたしの持ってきた「はなし↓縁談」じゃ」「↓削」お嫌かしら」「□「目は笑っていたが、声は笑っていないかった。↓削」□「とんでもない」□「だったら、逢うだけでも逢って「くだ↓下」さいな。あたしもひとつぐらい」「↓は」お役に立ちたいんですよ」□「君子は、こういう形で、割り込みたいと思っている。たみは断れなかつ↓ことばはやわらかいが、夫婦をのぞき込む目の

色には有無を言わさないものがあつた。

85・7 顔が「たみに↓母親」そっくりになった。

85・10 ワイヤー・ヘアード・フォックス「ド↓削」・
テリヤグ

86・1 怒つたような顔をして「座↓坐」つていた。

86・2・6 「ナシ」↓色白の凜凜^{りり}しい顔によく似合つて、さと子はどきんとしてからだが熱くなるのが判つた。門倉ははしゃぎ、君子は立つたり「座↓坐」つたりして気を「使↓遣」つた。「ナシ」↓たみはさと子と同じのほせた顔で、口で息をしていた。くる途中はなぜかふさぎ気味だった「仙吉「は↓も、辻村の顔を見ると」、おかしくもないのに笑つ「てばかりい↓たりして、これもしささか逆上気味だつた」。

88・1・91・10 「座↓はなし」が「和↓弾^を」んだのは、それからだった。□「その晩、↓新しいスキーの道具が入ったぞ、と門倉が仙吉を書斎に誘つた。（中略）□「毛布出しときましようか」□いつもの夫婦にもどつていた。□「さと子」はいつまでも↓も遅くまで「寝つかれず、

寝返りばかり打つていた。

91・14 ポツリと洩らした「↓。」

92・2 □「のひとも原因のひとつかも知れない↓それと、他人に金を用立ててもらつて縁談でもないだろうというのが本当の理由である」。

92・4 君子の仲立^{なかだち}で、「↓削」さと子を

92・7 決っている「と思つた↓削」。

92・8 「夫や仙吉夫婦↓たみ」をさそつて

93・9・12 「ナシ」↓「巷に雨の降るごとく□わが心にも□雨ぞ降る」□自分に詩が作れたら、こううたつていたと思つた。ヴェルレーヌという人も、見合いをして断られたのだろうか。」

94・7 さと子は「びっくりし↓魂消^{たまげ}てしまつた」。

94・8 「仲間と符牒で山のはなしをする時の↓□金齒とイタチの前で、「初太郎は「↓削」別

94・9 齒の土「堤↓手」で

94・10 木曾の「檜^{ひのき}↓檜」や

95・1 「さと子。↓削」何やつてんだ。

95・2 「カバン→鞆^{かばん}」と

95・10 箆筒の「抽斗↓抽斗^{ひきたし}」を

95・12 □夜鍋^{よなべ}をしながら「↓削」うたた寝を

96・5 競争相手続出で「↓削」苦しいらしいと、

96・7 社長なんておだてられて「ナシ」↓「倍にも三

倍にもでつかく見せて「た↓削」無理してたのが、

96・11 「いや、↓削」一番先に

97・2 「素寒貧↓素寒貧^{すかんぴん}」になったけど、

97・12 □狭苦しい玄関「ナシ」↓の三和土」いっぱい

に犬小「舎↓屋」があった。

97・13 ↓101・12 「仙吉は犬小舎に頭をつけて、君子に

挨拶した。↓削」□門倉の新しい「うち↓住居」は、仙

吉から見てもお粗末の一語「だ↓であ」った「が、君子は

姐様かぶりに割烹着で生き生きと働いていた。門倉が三

日に一度は、うちで夕飯を食べてくれるという。金がない

こともあるが、門倉は細君に罪ほろぼしをしているの

だと思い、文化アパートの一室で、せり出してゆく腹を

抱えている禮子の姿を考えて、仙吉は重いリュックサツ

クをふたつ背負ったようにくたびれてうちへ帰ってき

た。↓表札がわりの名刺が貼ってあった。(中略)□そ

の晩、仙吉はたみをぶん殴ってしまった。□へそくり

を出して「ナシ」↓やってくれ、と「いわれたたみは↓

頼んだのを」、□「そんなもの、ありませんよ」□「と答

えた↓たみが断ったからである」。□「ないわけないだ

ろ「ナシ」↓う。お前ほどの女が、へそくりがないなん

て、そんな馬鹿なこと「ナシ」↓「があるか」

101・14 おなかの子供のために、「ナシ」↓お前の分と

して」アパートへ金を

102・2 □仙吉「は↓の手が」たみの「横面を張り倒して

い↓頬で激しい音を立て」た。

102・3 ↓6 「ナシ」↓「たみの気持は判らないでもな

いが、無性に腹が立った。持ってゆき場のない気持を、

どうしたらいいか見当がつかなかった。大切にしている

大きな壺でもあったら、それを叩きこわしたかった。仙

吉は自分を殴る代りに、たみを殴ったような気がしてい

た。」どなるのは毎日のことだが、手を上げたのは十年ぶ

りのこと「だった↓である」。

102・8 「〔ナシ〕↓琴の」お師匠さんに

103・1 「うちでは〔ナシ〕↓、」飲ませて

103・5 あたし、新聞「↓を」三面記事から

103・14 「〔ナシ〕↓」夜遅くなって門倉が来た。（中

略）□奥のほうに虫歯があつて大きな洞が出来ているの
だが、歯医者のおつかない仙吉は治療を一日延ばしにし
ているのである。」

「4↓やじろべえ」

105・6 ↓ 107・3 「〔ナシ〕↓」仙吉は朝の町を韋駄天走

りで走っていた。（中略）バロンをかまいながら、門倉の
子が徴兵検査までには、あと二十年だなあと当り前のこ
とを考えて溜息をついた。□（一行アキ）

108・2 □辻村は「厨川白村↓厨川白村」や

108・5 ↓ 6 「でも、うちの母と「↓」削」門倉のおじ
さん「〔ナシ〕↓は」、手を握ったこと「〔ナシ〕↓も」ないと
思うんです。手どころか、ことばに出して好きだと言っ

たこともないと思うわ。「〔ナシ〕↓父も」知っていると
思ふんです。

108・12 ↓ 13 「恋愛。やっぱりそうなのねえ」□「辻村が
たばこをくわえたのでマツチをつけようとしたら、きび
しくたしなめられた。□「カフェの女給みたいな真似は
やめてください」□「門倉のおじさんの二号さん、カフェ
の女給さんなんです。この間、男の赤ちゃんが生れたん
ですけど、父も母も夜明かしで手伝いに行つてたんです
よ。それでも恋愛でしょうか」□「男女の愛は、どんな
愛も恋愛です」↓削」恋愛ということばを、

109・1 「苦↓苦」くて

109・11 「〔ナシ〕↓さと子は、」お母さんと同じ

110・3 ↓ 123・2 「（一行アキ）□次の稽古日、さと子が
おもてに出ると、初太郎が立っていた。たみに言われて、
迎えに来たらしい。辻村の姿はなかった。さと子は、まっ
すぐ帰らなくなかった。□門倉が、たちの悪い風邪を
こじらせて寝込んでいる。見舞いにゆこうと初太郎をさ
そつたが、□「気がすすまんな。男は落ちぶれてるとい、

人に見られたかないだろ」□「じゃあひとりでゆく。いいでしょ」□初太郎はうなずいた。□「よろしく言ってくれ」□そのまま、すたすた行ってしまった。□その背中を見ていると、蛾房へはゆけなくなった。蛾房のドアを開けて、もし辻村が居なかったら、あたしは本当に失恋したことになってしまう。逢いたい気持ちを押えて、一回や二回逢わないことこそ、恋愛だという気がした。それでも門倉のうちの方へ向って歩きながら、学生服の男を見かけると、胸がドキンとした。□門倉は、無精ひげをはやして、出て来た。君子はお使いに出掛けて留守で、バロンが、狭い玄關いっぱい犬の匂いをさせて尻尾を振った。□ひげのせいかな、門倉は年寄りじみて見えた。パジャマの上にとてらを重ね、敷きっぱなしの布団にすわって、お茶をいれるさと子を見ていた。門倉の視線が、自分の横顔のあたりを這っているのに気がついた。□「お母さんに似てきたね」と言うかと思ったが、門倉は何も言わなかった。□茶碗を手渡すと、□「お、いい色にはいった」□と呟いただけだった。□目をつ

ぶって、ゆっくりと茶を味わっていた。さと子のいれたお茶は、たみのいれたお茶と、似ているのだろうか。□さと子は、門倉に辻村のことを話すつもりだった。□父に殴られたこと。こういう形の男女のつきあいは間違っているかどうか。恋愛のはなしもしてみようつもりだった。だが、目を閉じてお茶を味わっている門倉を見ると、それでいいと思えて来た。□門倉には、たしかに父の仙吉の持っていないものがある。暗いところへゆくと、ひょいといたずらして抱きすくめられそう。ほかの女には思い切り下品で、たみやさと子にだけは上品に振舞っているような。□そばに座っているだけで、どこか騒ぐものがある。もしかしたら、子供の頃から、あたしも門倉のおじさんのことを好きだったのではないかと思った。□今日、門倉を、老けた、年寄りじみたと感じたのは、病み上りということもあるが、さと子の心の中に、辻村がいるということなのだろう。□君子が帰ってきた。□もうすこし、ゆっくり帰ってきてくれればいいのに、というものと、ほっとしたもののがまじり合って、

こういう気持をひとことで言うとういうことばになるのか、さと子は判らなかつた。↓☐ 琴の稽古には初太郎が送り迎えをすることになった。(中略)☐ さと子は、母親の鏡台の前で口紅を濃くつけ、足音を立てないよう、に勝手口から出ていった。

123・5 東京駅〔ナシ〕↓一、二等待合室だった。

123・7 本来は「↓☐削」

123・10 ときどき「↓☐削」ここで

123・11〜13 「初太郎は、↓イタチの猫ババをとがめ、イタチは必死でいいわけし、あとはお決りの初太郎の自慢ばなしだった。」札入れが百円札でふくれ上つていた全盛時代のはなしをしながら、「〔ナシ〕↓初太郎は」前のめりに

123・14 うちにかつぎこまれたとき「〔ナシ〕↓は」、「初太郎には↓☐削」もう死相が

124・2〜3 目で「↓☐削」もう駄目なのよ、と教えた。門倉は「↓☐削」布団の裾に「座↓坐」る仙吉にはひとこともいわず、初太郎の枕もとに「すわ↓坐」ると、

124・9 仙吉の腕を「取↓と」ろうとしたが、

125・5 「〔ナシ〕↓門倉は」けしかけるように

125・6 「自分で」かぞ↓数「えてみなさいよ」

125・10 百円札が散「つた。☐↓り、」たみが、

125・11 自分の顔を「↓☐削」白髪頭に

125・14 子供のよう「な↓に」声を

126・2〜3 本箱にならんだ「〔ナシ〕↓むつかしい」本の背文字がぐるぐる「と↓☐削」廻ったかと思うと、生あたたかいものが「押↓お」しつけられた。

126・12 「香華↓^{こうげ}香華」がゆれ

126・13 飴色に使い込んだ「やはり↓☐削」初太郎の「〔ナシ〕↓象牙」箸が

126・14 腕組みして「すわ↓坐」っていた。

128・4 顔も見たことのない「↓☐削」仙吉の

128・5 酒を「飲↓の」みすしを

128・9 そばに「すわ↓坐」った。

129・2 ☐「しかし、↓☐削」たみは、

129・8 これ、「ちが↓違」って

129・9 お母さんの落度「、↓が」判らないように、

129・11～12 □「はじめて見る母の顔だ↓」「おじいちゃんのお通夜に笑ったりして、お父さんにみつかったら叱られるね」と言いながらまた笑」った。

130・3～8 □さと子は「白菜の↓〈削〉」漬物を出しに

台所へ立った。「□「夫婦相和シ」□「朋友相信ジ」□勅語の一節が聞えてきた。□たみと門倉は、これからも決して言葉に出して好きだと言うことはないだろうと思った。だからこそ、仙吉も門倉を信じ、たみを信じ

『オール読物』掲載「やじろべえ(あ・うんパートⅡ)」

「一 四角い帽子↓四角い帽子」

131・9 父親の「水田↓〈削〉」仙吉と「親友の↓〈削〉」門倉「修造↓〈削〉」である。

132・3 と仙吉の痛いところについて逆襲した。「仏は材木専門の山師だった。↓〈削〉」

132・13～14 ようやくけりがついた。□「仙吉は短軀わいせう矮小にして醜男。門倉は長身美男。仙吉は月給取りだが、

て生きてゆけるのだろう。どんな時代になろうとも。↓

〈削〉」□隣りのラジオが、ニュースを伝えていた。□「蘆溝橋事件勃発を知らせるものだったが、↓〈削〉勢いよく蛇口をひねり「↓〈削〉」水を出しているさと子には「聞えなかった。↓、南京特電、蒋介石、徹底抗日、抗日即戦主義を避け、柔軟なる和平外交を以て臨みたい、というような言葉がきれぎれに聞き取れただけだった。□蘆溝橋事件が起きたのは、この半年あとである。」

門倉は門倉金属の社長で、軍需景気に乗って金はうなっている。年だけはい年の四十三だが、見かけも中身も正反対の二人のまんなかになんて坐って、気を揉もんだり仲裁をするのが、仙吉の女房のたまであった。↓〈削〉「さういえば死んだ初太郎が、

133・1 □「猪鹿蝶いのしかちやう↓猪鹿蝶」の

133・8 おつき合いですません「ナシ」↓よ」

133・13 □「門倉は「、↓〈削〉」そのまま
 133・14 一番「の↓〈削〉」幸せなのだ。
 134・4 「^{ひな}雛↓雛」祭り、お花見、海水浴、「^{まつたけ}松茸↓松茸」
 狩りに
 134・6 さと子は十九「であ↓になつてい」る。
 134・13 すぐ門倉が「ナシ」↓「女房の
 135・9 お経の最中に「盛大に↓〈削〉」洩をすすり
 136・1ゝ2 □「もとカフエの女給だったが、きのい
 い女だった。□「こんどのひとは感じがいいじゃない
 の」□とたみに言われたひとことが引き金になって、店
 をやめさせて面倒をみるようになった。男の子が生れ、
 子種がないと諦めていた門倉は、嬉しさのあまり、一番
 にたみに知らせようと往来に飛び出して馬力^{ばりき}にぶつかり
 怪我をするという騒ぎだった。↓これだから御座^{おざ}に出せ
 ないんだよ、といったげに門倉は苦笑してみせたが、ひっ
 くり返せばこういうところが気に入っているんだよとい
 うことらしい。」□ところが、
 136・5 □「一分の「隙^す↓隙」もない黒の紋「つき↓付」姿で

136・6 □「頭痛が少し「納↓治」まった
 136・9 □「たみの「気↓機」転で、
 137・13 □「お「内儀↓女将^{かみ}」が恐縮^{きようしゆく}して、
 流行^{はやり}つ「妓↓妓^こ」を
 138・4 ヤボな客で断「わ↓〈削〉」るのが
 138・5 糸目をつけないから、「う↓こつ」ちの座敷に「
 138・6 のほせるだけあって「ナシ」↓「上背のある
 139・9 「おい「、↓〈削〉」水田」
 139・10 「あら「ナシ」↓、「こちら「、↓〈削〉」子爵様じゃ
 ないの」
 139・12 床柱背負つてたんじゃ「、↓あ」飲んだ気が
 140・6 なにかが走った。「柱↓電気」時計を
 141・7 名前を繰「り↓〈削〉」返した。
 142・3 女は子供「生↓う」むと
 142・4 沢庵を「嚙^か↓嚙」んだ
 142・5 老けた顔になるということは「ナシ」↓、「言わ
 ずにおいた。
 142・9 二号「ナシ」↓「さん」の禮子も、

143・1	思いが「ナシ」↓、「夜の	151・2	□卵の「殻」↓「殻」の
143・5	「梅ヶ枝の「ナシ」↓□「手水鉢」。	151・12	及ばぬ鯉の滝「登」↓「り」に
143・6	「梅ヶ枝の「ナシ」↓□「手水鉢」は	151・14	おい「ナシ」↓、「言うなよ、と釘を「差」↓「さ」した
143・8	聞えたので、「↓削」腹を	152・4	何も金「使」↓「つか」って
143・12	お盛りものの「饅頭」↓「饅頭」を	153・2	「↓御」真影が
143・13	あんた「は」↓「嫁さんだ」「ナシ」↓「つた」な	153・5	型崩れした「盤」↓「盤」の
145・13	「おい、鳥屋、「替」代「えろよ」	154・4	玄関の「ガラス」↓「格子」戸を
146・11	□老人とならんで「ナシ」↓「四角い	154・14	羽「交」↓「掻」いじめにして、
146・12	これも「ナシ」↓「とりわけ	155・6	『天網「恢恢」↓「恢恢」疎ニシテ「漏」↓「洩」ラサズ』
147・2	□学生は痛いだろ、とよけながら、「□↓「改	155・8	たみの目が「ナシ」↓「階段の
行ナシ」	「もう坊ちゃんて年じやないよ。	155・14	□話が「途切」↓「とき」れると、
147・13	□「視」↓「視」き込んだ	156・12	「洒落」↓「洒落」か
148・6	「煙管」↓「煙管」を出し、	157・9	お父さんに曲「が」↓「削」られたら
149・12	さと子は「駆」↓「駈」け出した。	157・11	そう簡単に曲「が」↓「削」るか
149・13	オリエ津「坂」↓「阪」みたい	159・2	小「抽斗」↓「抽斗」が
149・14	帽子の「歪」↓「歪」みを	159・11	片「附」↓「付」いてるのか
150・7	洗面所の鏡に「ナシ」↓「歯」ブラシをくわえた	159・12	入用だと「そっくり返」↓「居直」った。
まま「↓削」ぼんやり		160・6	お金「使」↓「つか」って

160・8 「出かける前に「ガタガタ→ゴタゴタ」言うな」
 160・10 口に押し込み「ナシ」↓、「食べはじめた」。
 161・6 こういう「争^{いさ}か→諍^{いさか}」いを
 161・12 二の次「ナシ」↓、「三の次に
 161・13 たみを泣かせ「ナシ」↓、「金を
 162・9 目を覚「ナシ」↓「ま」していた
 162・14 晩酌もやめ「ナシ」↓、「元気が
 163・6 袋を下げていた。「□」↓「削」ガチ袋と
 163・8→9 「稽古↓稽古^{けいこ}」をしていたが、ゴ「ボ↓ボ」チ
 ンスキーとか、デ「ボ↓ボ」チンスキーと
 163・14 道具のおかげで「ナシ」↓、「笑ったら
 164・3 □「でもうち「ナシ」↓、「ミシン」↓「削」無
 いんだわ。
 165・13 「二六↓一六^{いちろく}勝負に
 166・2 禮子と「↓削」引っぱるように
 168・3 近づいた。□「水田」↓「おい門倉」
 168・4 □仙吉は「ナシ」↓、「ゆとりを
 168・5 □「門倉、↓削」前とは違うんだぞ。

169・1 □「「ナシ」↓坊や」これ落としてったわよ」
 169・2 片方を手に「して来↓出てき」た
 169・8 黒出目金のように「腫^は↓腫」れているのは、まり
 奴に「子供↓守」の靴を
 170・6 三号は断「わ↓削」るね。
 170・9 「落籍↓落籍^{ひか}」したんだろうが、
 171・7 おこつても「ナシ」↓「も」らっている
 172・1→2 それまでだけどさ「↓」生れて「始↓初」
 めて女にのほせたんだ。氣を利かすのが「ナシ」↓、「友
 達つてもんだろ。
 172・5 身を「誤^{あやま}↓過^{あやま}」る。
 172・11 仙吉が「ナシ」↓、「綺麗」と言うなよ、
 173・4 出さないでくれと「ナシ」↓、「言いたい放題
 173・6 仙吉は「ナシ」↓、「今日明日と
 174・3 立って「ナシ」↓、「大きな
 176・9 「二 芋俵↓芋俵」
 玄関の「ガラス↓格子」戸が

- 176・10 目が「す↓据」わっている。
- 176・11 仙吉と「修造↓門倉」を
- 176・12 押入れをあけ「る↓た」。
- 177・7 仙吉と「修造↓門倉」は
- 177・10 「梯子^{はしこ}↓梯子」段を
- 178・11 仙吉と「修造↓門倉」を見くらべると、いきなり
- 「修造↓門倉」の
- 179・4 お「幾^{いく}↓幾」つ
- 181・3 『おかみさん、お「いく↓幾」つ』
- 183・7 酒乱で「ナシ」↓、「飲むと
- 183・11 「軀↓軀」け出せない。
- 183・14 □ 作造「ナシ」↓と「は断じて色恋沙汰ではな
- い「ナシ」↓、と「↓削」一同を
- 184・13 たまったもんじゃないよ」「ナシ」↓□ 勢い込ん
- で言う門倉に、ふみは、
- 184・14 □ 「こちら、「息子↓ご主人」さんですか」
- 185・1 □ 「息子は↓門倉は一瞬たじろぎ、主人」はあつ
- ちだと仙吉を指さし、「↓た。」
- 185・2 「息子↓親戚」といっても、
- 185・5 ↓6 作造「にはやさしい↓をもてなす」のが
- 185・7 「煙管^{きせる}↓煙管」を
- 185・8 やわらかく「↓削」作造を突「ナシ」↓「つ
- いて「ナシ」↓、「物かげへ
- 185・14 考えてやらなきゃなあ」「改行ナシ」↓□「あ
- てこすりを
- 186・3 顔を見合「わ↓削」せ溜息をついたところで、
- 事情を察したらしいふみが「ナシ」↓、「
- 186・7 結局「ナシ」↓、「作造に
- 187・2 ドキドキして「↓。」
- 188・1 義彦は「ナシ」↓、「笑いながら
- 188・11 鱈^{しやちほ}の鱗^{うろこ}「が↓削」盗まれたの、
- 188・12 入ってくりや「ナシ」↓、「あたしに
- 188・14 大事にされて「い↓削」ない
- 189・2 おやじさんのほうが「依怙^{いこ}地↓依怙^{いこ}地」だった
- 189・7 数「ナシ」↓を「教えるの。一、二、三、四。二」つ
- て↓つと」いうとき、

189・10 ここがカー「ナシ」↓「ッ」と
 189・12 けり「が」↓「削」ついた
 190・4 これ「ナシ」↓、「なんでしよう」。
 190・7 □「こういうとき「ナシ」↓の」門倉を
 190・11 「鞆」↓「鞆」を受けとったのは「、↓「削」」白い割烹
 着を着た「ナシ」↓、「芋俵の
 191・1 うち「に」↓「へ」置くことにしたと言われて、門倉
 は広い玄関に「案山子」↓「案山子」のように
 191・5 □「用達」↓「用達」しに
 191・6 ドンブリがけと「ナシ」↓、「割烹着が
 192・1 「ナシ」↓女って「こんな
 192・2・3 出かけ直したんですけどね」「↓。」「待てよ、
 やっぱりおかしい。そう思って「ナシ」↓、「もう一度、
 192・4 井戸端に「たらい」↓「盥」を
 192・9 淡「々」↓「淡」としていたが、
 192・10 ふみは絵「で」↓「に」描いたように「下」↓「削」「うつ
 むき」「ナシ」↓、「洋間なので」「ナシ」↓、「畳のケバの
 192・14 珍しく」「↓「削」」どもっていた。

193・7 煙管でひ「よ」↓「よ」と
 194・4 □「門倉は「ナシ」↓、「参ったと
 194・10・11 それを」「普通の人間は↓みんな」まわりに
 気兼ねして、
 194・12 うしろを「ぶん」↓「ブン」殴られた
 195・1 そう手「放」↓「離」して
 196・4 □「年寄「ナシ」↓」って
 196・9 恥かせることになる「かしら」↓「わ」ねえ」
 196・10 □「ほんとだったんです」「↓。」「作造さん、
 作造さんに「は」↓「や」かないやしません。
 196・12・13 肝「心」↓「腎」の体のほうが「、↓「ナシ」
 197・13 或日」「↓「削」」突然
 198・2 いやにリキ「ン」↓「ン」で
 198・10 □「そう「ナシ」↓「よ」。そうですよ」
 198・3 枯木に花が咲いたんだ」「↓。」「
 198・4 ちらちらと覗「っ」↓「いた」。
 200・5 許せない「ナシ」↓「よ」。
 200・13 必死に「、↓「削」」ことを

- 201・2 女房としては嫌だ「って↓と」言っ
て
- 201・3 絶対「に↓削」嫌よ」
- 201・9 □と繰「り↓削」返した。
- 202・1 □「拾↓拾」の下に追加のルパシカをかくして
縫っているところをたみに見つかった「。↓削」さと子は、
- 202・4 ロシ「ア↓ヤ」ですと
- 202・7 正直に言えば「、↓削」怒られることは
- 202・9 □「よし」。↓言いたくないのなら
- 202・10 水も飲むな「。↓、」 便所にも
- 202・11 とりなしたが「、↓削」仙吉は
- 203・1 震え「だ↓出」した。
- 203・3 食ってかかり、「結局、↓削」その晩は
- 204・1 ぼくだけじゃないでしょう「、↓。日本という
- 204・7 かぶれるんだ」「改行ナシ」↓□「と」「ナシ」↓
どなって「力ずくで
- 204・10 子供の手「、↓削」引っぱって「ナシ」↓、
- 205・5 肩で風切ってるってこ「と↓削」も
- 205・9 大工の下「ナシ」↓「つ」働きにしか
- 206・1 態度が変わってきた。「三流の製薬会社の万年課
長の↓月給取りといっても先行き多寡の知れている」仙
吉が、
- 206・3 さと子は思った。「改行ナシ」↓□「近々に、
- 206・6 □日取りの打「ち↓削」合わせに、さと子が
はじめて「、↓削」義彦の
- 206・8 裏から逃げろ「。↓、」万一、
- 206・14 □仏壇に「灯↓燈」明を
- 207・6 コロツと引っくり「かえ↓返」って、
- 207・11 □「灯↓燈」明の
- 208・1 言い直した。↓て、
- 208・2 □「おじいちゃん死んでから、世の中どんどん
悪くなるなあ」。「↓□」お前のところは儲かっていいか
も知れないが」
- 208・8 □「むず↓つ」かしいなあ」
- 208・11 □「むず↓つ」かしいな。

「三 四人家族↓四人家族」

210・2 禮子が「ナシ」↓、「けたたましい声で
211・4 □「どうしたの」↓、「ねえ」
211・5 ゆさぶると、「門倉は↓「削」のどの奥をぐうつ
と鳴ら「すと」して」、
211・9 男の「癖↓くせ」して
214・1～2 帰るとこだよ「。↓」西瓜持ってきたから
お上りといって「、↓「削」手を振り「ナシ」↓、「歩いて
いった。
214・10 尻尾「を↓「削」振って
215・11 □「門倉」。「↓」お前、
216・10 つき合ってくれ「。↓」仕事の
216・11 「おれ↓お前」の紙入れは「お前↓おれ」のもの。
217・10 □「蒼↓蒼い顔をして
217・11 つき合いを「絶↓断」つと
217・12 遊びにくること「は↓が」あっても、
217・13 見合「わ↓「削」すだけ
218・2 言われたよと「、↓「削」しゃべっていると、

218・5 □「たかりって「ナシ」↓、「ゆすりたかりの
218・13 「布団↓布団」に起き上って煙草を「す↓喫」つ
ている
219・9 仙吉は「ごろりと↓明方まで」寝返りを打つ「ナ
シ」↓「てい」た。
220・12 ほてった「体↓からだ」を
221・1 □朝刊をひろげた「ものの↓まま」、
221・3 「『舞踏会の手帖』↓「舞踏会の手帖」
221・14 門倉ならこうするな「。↓」そこに
222・14 たみの「割烹着↓割烹着」の裾を
223・2 □「奥さん」。「↓」すみませんが、
224・12 さと子は、「二号さんの禮子とぶつからないよ
うに、合図の白い豆腐屋の旗を出さなくてはいけないな
と思いつながら↓お茶を出すと仙吉に叱られるかなと迷
い、やっぱり出そうと決めながら」、もうすこし、
224・13 聞きた「いし↓くて」、「と迷↓台所へ入るのを
ためら」っていた。
225・1 仙吉は「ナシ」↓歩いていて「人に

- 225・6 □「目黒駅を「下↓お」りたところの
225・9 手を差「し↓削」出した。
225・12 目と鼻「ナシ」↓のところ」におでん・かん酒の
226・12 薬品のほうやって「る↓削」んだけどね、
227・6 □「勿論「、↓削」そんなことは
227・9 気が短いもんで「ナシ」↓、「絶交だと
227・14 老人は、「がつがつ↓ガツガツ」と食い、
228・11 一緒に「引↓ひ」っばって
230・1 □「お宝が入ってるから「、↓削」手出す「ナシ」↓」か。
230・14 □「お前はもの知らないね「、↓」。
233・3 上り「が↓か」まちに
235・1 1 2 「両天秤りょうてんびん」に
236・5 いまにも噛んでやるとい「った↓う」風に
236・14 □「召集令「ナシ」↓状」がきました」
238・9 □「といったようだが「ナシ」↓、「門倉にも
239・7 「悔く↓悔や」んでいた
239・9 240・14 「ナシ」↓ □「初産ういざんで長引いたせい

さと子は生まれたとき頭が長く格好が柿の種子に似ていた。(中略) □さと子の十九年の写真帳のなかに、影になり日向になっていつも門倉がいた。」

241・8 少なかった。「改行ナシ」↓ □「門倉も「ナシ」↓、「言い過ぎたよ、

241・9 門倉は「ナシ」↓、「ちよくちよく

241・10 男の「煙草の↓削」空箱で

※なお、『向田邦子全集三卷』（文藝春秋、昭和六三年八月二二日）収録『あ・うん』と初版本とでは若干の相違があるのをこれを示す。底本頁・行（全集頁・行）「底本↓全集」で異同を示す。

26・11（226・13）「ナシ」↓大事そうに「一本抜いて火をつけた。

140・2（318・7）「だまして「すみま↓申訳ありま」せんでした」